

2026年1月11日（日）

コリントの信徒への手紙 一 第6章12節～20節

「私たちは主のもの」

【私たちは主のもの】

私たちは先ほど使徒信条で「我らの主、イエス・キリストを信ず」と告白しました。私たちの主人はイエス様ですと告白しました。主人がいるということは私たちはその主人のものと認めることです。「我らの主、イエス・キリストを信ず」という告白は「わたしはイエス様のものです」と告白することです。神が「あなたはわたしのものだ」と宣言してくださるのです。

そして、「あなたはわたしのものだ」という宣言が19節と20節です。「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。」

「あなたはわたしのものだ」という神の宣言に「そうです、主よ、わたしはあなたのものです」と応答しながら生きることがキリスト者の生き方です。そして、その応答をハイデルベルク信仰問答という本ではただ一つの慰めと紹介しています。

「問1 生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」

答 わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。この方はご自分の尊い血をもってわたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。」「わたしの全ては主のもの」という恵みはイエス様を主と告白することで与えられます。しかも、この慰めは生きている時だけではありません。死ぬときにおいても、そして、死を経験した後も、力を発揮する唯一の慰めです。私たちが救われるとはこの唯一の慰めを知って生きることであり、そして、死ぬことです。

ところでこの「慰め」という言葉はある辞典では「信頼に生きること」と説明されているそうです。主に信頼しながら生き、死ぬことが出来る、それが慰めであり、その慰めの根拠は19節の「あなたがたはもはや自分自身のものではない」という御言葉です。そして私たちが主のものとされたことを20節では「代価を払って買い取られた」と語られています。私たちをご自分のものとするために主が払われた代価は主イエスの血です。主イエスの命です。

神は独り子の命を代価として、私たちを買い取ってください、神のものとしてくださいました。私たちに代価を支払うに値するものがあつたからではありません。そのようなものは何もなかったのに神様は独り子の命という途方もない代価を支払ってくださいました。今日の招きの言葉はイザヤ書 第52章3節です。「あなたがたはただで売られた。それゆえ、金を払わずに贖われる。」「金を払われずに贖われる」とは、ただ神の恵みによって買い戻されるということです。私たち自身はそのままでは罪の中にあり、神によって滅ぼされるしかない者です。その意味では何の価値もない者でした。しかしその私たちを神が一方的な恵みによって愛してくださいました。「私の目にはあなたは高価で尊い」と宣言してくださいました。あなたには価値がある、あなたは御子の命を支払ってでも買い取るほど尊いのだということです。そして、あなたは尊いという神の御声への応答が「主イエスよ、わたしの全ては主であるあなたのものです。」と告白することです。

【何と結びついて生きるのか】

イエスを主と呼ぶことはとても大切で重いことです。イエスを主と呼ぶことは、私はあなたのしもべ、あなたが私の主人ですと告白することだからです。あるじを持つこと、支配者、自分には王がおられると認める、それがイエスを主とすることです。

買い取るという言葉には強引に私たちを取り戻すという強い意味があるそうです。私たちは主イエスを主人とする前も主イエスではない何かが主人でした。それは自分かもしれませんし、会社、金銭…様々なものが私たちを支配しようとし、します。しかし、ある牧師はこのことについてこのように語ります。「私どもがつい身を委ねたくなるような、偽りのあるじがたくさんいるのです。信仰というのは、そういうすべての偽りの主人に『否』と言うことです。それに逆らって『これでもない、あれでもない、イエスこそ私の主だ』とすることであり、です。『イエスは主なり』とすること、それは教会の歴史始まって以来ずっと一つの闘いでありました。」この闘いが今日共に聴いておりますこの箇所でも語られています。

15節から17節までを読みます。「あなたがたは、自分の体がキリストの体の一部だとは知らないのですか。私がキリストの体の一部を取って、娼婦の体の一部にしたりするのでしょうか。決してそんなことはない。娼婦と交わる者は、その女と一つの体となる、ということを知らないのですか。『二人は一体となる』と言われていました。」この箇所では主イエスを主人とすることをキリストの体の一部と表現しています。主イエスを主と呼ぶことは、主イエスに結びついて生かされるのです。そして、この箇所で語られていますのは、娼婦と交わり娼婦と結びつくのか、それとも主イエスと結びつくのかです。

そして、この箇所はコリントの人々だけに向けられた言葉ではありません。私たちも神に問われています。「あなたは主イエスと結びついて生きるのか、それとも主イエス以外のほかの何かと結びついて生きるのか。」例えば、旧約聖書ではまことの神様ではなく、ほかの神様に、つまり偶像に心を寄せることを「姦淫」と呼びました。ここでも娼婦と交わることに、主イエスではなく、ほかの誰か、他の何かを主人としていないだろうか神は私たちに問うています。

19節の前半に「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり」とあります。この「知らないのですか」という言葉は、この手紙を書いたパウロが特に大切なこと、急所を伝える時に用いています。その急所は、私たちの体は、「神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿」だということです。間違えてはならないのは、私たちが主イエスと結びつこうと決断し、清く、正しく生きることによって、聖霊が宿ってくださる神殿になると言われているのではないということです。そうではなく私たちの体はすでに「聖霊が宿ってくださる神殿」であるとパウロは宣言しています。洗礼を受け救いにあずかることによって、私たちの体はキリストの体の一部とされ、神様から聖霊をいただくことによって、すでに「聖霊が宿ってくださる神殿」です。体も心も、私たちそのものが聖霊の宿っておられる神殿です。これは驚くべきことです。なぜなら、このパウロの言葉は、コリント教会の中で「淫らな行い」をしていた者にも向けられているからです。「淫らな行い」をしていた人の体が、「聖霊が宿ってくださる神殿」と言われていることに、私たちはふさわしくないと思いかもしれません。

しかし、私たちも、自分自身を振り返れば、自分の体が、自分の人格が、自分という存在が、「聖霊が宿ってくださる神殿」にふさわしいとは言えないのでは

ないでしょうか。先週1週間、私たちは聖霊が宿ってくださるのにふさわしいと
いつも思えたのでしょうか。そんなことはないでしょう。しかし、それにもかかわ
らず、救いにあずかり、キリストの体の一部とされることによって、今も私たち
は「聖霊が宿ってくださる神殿」です。

同じコリントの信徒への手紙の第12章3節に「聖霊によらなければ、誰も
『イエスは主である』と言うことはできません。」とあります。皆さん、私たち
が主イエスが主人ですと告白させていただけるのも、私たちが神の神殿とされ
ているのもすべては主イエスのおかげです。

私たちをご自分のものとして取り戻してくださるために、主イエスは十字架
にお掛かりになられました。そして、主イエスが「聖霊を受けよ」と宣言してく
ださり、その宣言どおりに私たちに聖霊が注がれました。この聖霊が働いてくだ
さっているから、私たちはこの十字架がわたしのためと信じられるようにして
くださいます。今日も私たちはイエス様が私の主人ですと告白させていただける
のも聖霊の働きです。そして、今も聖霊が私たちに宿ってくださるのです。
私たちがさせていただくことは全ては主イエスのおかげですと認めることです。
信仰とはそのように全ては主のおかげですと認め続けることだと私は思います。
そして、そのように認めることが私たちの復活だと思うのです。もちろん、その
ように主イエスを主人として生き直す、認め直すことも神の働きです。そのこと
が14節では「神は、主を復活させ、また、その力によって私たちをも復活させ
てください。」と語られています。神が主イエスを復活させ、そして、私た
ちのことも主イエスを主人とさせていただけるように復活させてくださるのだ
す。それが十字架の恵みです。「主イエスは私のために死んでくださった。よみ
がえってくださった。アーメン。」そうして、主への感謝を毎日の生活で、日々
繰り返し心に覚えながらこの体も含めて生きていけばよいのです。

17節には「主と交わる者は、主と一つの霊となるのです。」とあります。こ
の御言葉も「すでにあなたは主と交わっている、あなたにも聖霊が注がれ、あな
たはもう主と一つだ。あなたも神の神殿だ。」という事実を認めようという招き
です。そして、そのような神の神殿とされている私たちが集められているところ
が教会です。

【教会は主イエスのものという表札を掲げているところ】

使徒信条では「我らの主、イエス・キリストを信ず」と告白します。我ら、私
たちということです。主イエスは私の主人であり、同時に私たちの主人です。こ
れもとても大切です。主イエスと私との繋がりは一では成り立ちません。主イ
エスは本当は全ての人の主人です。そして、主の御業を理解し、受け入れた全
ての人の主人です。教会とはそのような私たちが集められているところです。

教会という言葉は英語でチャーチと言います。これはギリシャ語で「主のもの」
を意味する「キリアコン」という言葉から生まれたそうです。そして、「キリア
コン」には「主の家」、「主に属する者」という意味で用いられるようになりました。

私たちは「教会」という日本語を聞きますと、何かを教えられるところとイメ
ージするかもしれません。しかし、教会、チャーチとは「主の家」「主に属する
者たちの集まり」「主の家族」という意味です。私たちの家には表札を掲げるこ
とが多いでしょう。この教会にも英語で「OHAMI CHRISTIAN CHURCH」と表札が掲
げられています。表札の目的はその家に誰がいるのかを伝えるためです。イエ
ス・キリストを主人とする家族が作る家が教会です。そして、そのことが表札と

してこの教会にも掲げられています。主イエスを主人とするとは私だけの主人ということではありません。主イエスを主人と告白するのは、主イエスを主人とする仲間がいるということを知っていることでもあります。私たちが生きている時にも、死ぬ時にもいつもその仲間がいます。たとえ、どんなに孤独な死に方をするようなことがあったとしても、それでも、死ぬ時にはいつもその仲間と共にいるのです。そのようにして、仲間と共に主のものとして生き、主のものとして守られて生きるのです。

そして、そのように生きる私たち一人ひとりにも「主イエスが私たちの主人です」という表札が掲げられています。コリントの信徒への手紙 二 第1章22節に「神はまた、私たちに証印を押し、保証として私たちの心に霊を与えてくださいました。」とあります。私たち一人ひとりに「あなたはわたしのものだ。」という証印が押されています。「私たちは主のものです」という表札が刻みつけられています。そして、この証印が消されることも、表札が取り外されることも、もうありません。今この時も、そして、死を迎える時もです。生きている時の表札を持ったまま死を迎えられるのです。それが主人である主イエスが与えてくださる恵みです。